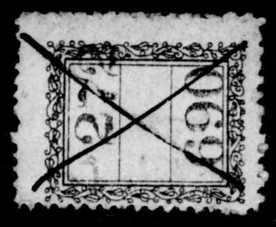
特103
364



特103
364

人生日用的

眞井僧正著

眞言宗傳道團

露光量違いの為重複撮影

特103
364

人生の目的

眞井覺深

大正
4.17
内交

一　活動と目的

物理學者の話を聞いて見ると、宇宙間の一切の萬物は皆悉く動いて居ると云ふことだ。礦物も動けば草木も動く、下等動物や人間は無論のこと、地球も動けば太陽も動く。此の如く總ての物が皆動くのであるが、礦物よりは植物、植物よりは動物、下等動物よりは人間、野蠻人よりは文明人と云ふ順序に、進歩するに從うて次第に活動が盛んになつて來る。我が日本帝國も明治維新已來、長足の進歩をなすに連れて、日一日と活動の度合が劇しくなり、活動の舞臺が廣くなり、此頃の忙しさは社會の各階級を通じて、實に目の回はる程で、少しく油斷をすれば時勢の落伍者となりて人後に取り殘されて仕舞ふ。されば大正の國民たるお互は、大に奮發し、大に勉勵し、大に努力して大活動をなし、

目次

一　活動と目的
二　誤まる目的
三　死せる目的
四　眞正の目的
五　目的の基礎
六　目的の援助者
七　目的の實行

露光量違いの為重複撮影

特103
364

人生の目的

眞井覺深

大正
4.17
内交

一　活動と目的

物理學者の話を聞いて見ると、宇宙間の一切の萬物は皆悉く動いて居ると云ふことだ。礦物も動けば草木も動く、下等動物や人間は無論のこと、地球も動けば太陽も動く。此の如く總ての物が皆動くのであるが、礦物よりは植物、植物よりは動物、下等動物よりは人間、野蠻人よりは文明人と云ふ順序に、進歩するに從うて次第に活動が盛んになつて來る。我が日本帝國も明治維新已來、長足の進歩をなすに連れて、日一日と活動の度合が劇しくなり、活動の舞臺が廣くなり、此頃の忙しさは社會の各階級を通じて、實に目の回はる程で、少しく油斷をすれば時勢の落伍者となりて人後に取り殘されて仕舞ふ。されば大正の國民たるお互は、大に奮發し、大に勉勵し、大に努力して大活動をなし、

目次
一　活動と目的
二　樂しむ目的
三　苑せる目的
四　眞正の目的
五　目的の基礎
六　目的の活動者
七　目的の實行

時運の趨勢に後れざるのみならず一歩進んで時勢を導くの大決心を以て事に當らねばならぬ。併し如何程大活動をなしても夫に一定の目的がなかつたならば、折角の活動も終に徒勞に歸するのである。

此處に一隻の蒸汽船があつて、石炭をドン〳〵焚き、全速力を以て海上を走つて居るから、其船長に向ひ此船は何處の港へ航行するのかと問ひしに、着ける港は定めて居らぬ唯だ走つて居るのだと答へたならば、何人も其船長の馬鹿な無駄働きを笑はぬ者はあるまい、お互が人生の航路を行くは恰も蒸汽船が海上を走ると同樣であるから、正しき一定の目的を立てゝ大活動をなし、彼の馬鹿船長の仲間入りをせぬやう心懸けることが肝要である。

二　誤れる目的

犬や猫ならばイザ知らず、文明國の人民たる者にして、目的なしに活動する馬鹿者があるものかと云ふ人があるかも知れぬ。併しながら縱令目的を立てゝ居ても、若し其目的が誤つて居たならば恰も西に行くべき船が南に走ると同じことで、其盲動と無駄働きとの點に於ては、全く目的のないのと同じ結果になるのみならず、時としては誤れる目的を有する人は、目的なき人よりも却て害毒を社會國家に與ふることの多き場合がある。大抵の人は衣食住のために働くのだと思うて居るらしい。固より生きて居る間は、寒暑を防ぐに衣服を要し、飢渴を慰するに飲食を要し、雨露を凌ぐに家屋を要するは勿論なれども、これのみを得るを目的として働くものとせば、人間と畜生と何等の區別も附かぬことになりはせぬか。且又た衣食住を得んが爲めに働くとして見れば、其反面に於て衣食住に事缺かぬ富豪者は、働かなくてもよいと云ふ不都合な理屈が出るでないか。我が日本國民中にブラ〳〵遊んで暮す者をエラ者の如く思ひ、他人も之を羨み自身も之を誇る惡風があるのは、人生活動の目的は衣食住を得るに在るやう誤認せし惡結果で、返すがへすも遺憾の至りである。能く考へて見給へ、若しブラ〳〵遊んで暮す者がエラ者ならば、今一歩を進めて飯も下女に食はして貰ひ頭と腮とを押へて嚙ましして貰ひ、寢るも起るも人手に任せたならば尙更らエラ者となる譯であるが、夫れではエラ者と中風病み

と同じことになりはせぬか。かゝるエラ者は社會國家の厄介物であるから、其仲間入りは眞平御免を蒙りたい。

生物進化論の學者に聞けば、不用な物は自然に無くなり、必要な物は自然に出來るとのことである。太陽の光線の屆かぬ深い淵の中に居る魚は眼の必要がないから眼がない、獸類たる鯨は水中生活をする必要上鰭や尾が出來て魚類と同じ形になつた。お互人間にも昔は尾があり耳も動いて居たのだけれども、次第に其必要が無くなつた爲めに、自然に耳が動かぬやうになり、尾が無くなつたのであると云ふことだ。此の道理から考へて見れば腦の中では晝夜盛んに惡い計略ばかりを凝し、口では常に駄法螺を吹き通して手や足を使ふことを厭ふ人間が蕃殖したならば、手や足は次第に少さくなるに反し、頭と口は次第に大きくなり、數千年の後には玩具の福助見た樣な人間が出來るかも知れぬ。

富める者にして徒らに遊惰安逸に耽り、其身に暇あるに任せて惡風を社會に傳播するが如き、又は貧しき者にして勞働の神聖なることを悟らずして、唯だ口腹の欲を充たすことにのみ焦慮し、夫れ已上一歩も向上すること能はざるが如き者あるは、全く誤れる目的より來る弊害なれば、今後は互に相誡めて其誤りを矯正し、富みて淫れず貧うして傷らざる底の人とならねばならぬ。

三　死せる目的

自分や一家族の衣食住には不足なけれども、大に進んで巨萬の富を作り天下の大財產家となりたいと思ひ、或は名譽を世界に博せんことを望み、或は學理を究明して古今の學者を凌駕して見たいと思ひ、或は權利を握りて天下國家を左右せんと志して日々活動して居る者がある。是等の人々は其目的を衣食住已上の處に立てゝ居るのであるから、普通一般の人は之を以て大層立派な目的の如く思ふかも知れぬが。眞理の鏡に照して見れば案外お粗末な目的と謂はねばならぬ。何故なれば人間は生れながらにして、權利、名譽、財產、智識、長命などを得たいと思ふ欲心がある。而して其欲心なるものは

思ふこと一つ叶へば又た二つ
三つ四つ五つゝ六つかしの世や

と古人も詠ぜられし如く際限のなきものなれば、之を得るを目的として働くのは、單に本能の欲望を滿足させたいと云ふに過ぎぬからである。單に本能の欲望に衝動せられて働くのみでは、彼の下等動物が食を尋ねて駈け回はるのと、其差は五十歩百歩の相違で、何等人間の價値を其所に認むることが出來ぬではないか。

自分の欲望したる物を得て、之を如何なる道に使用すべきかを考へざる人は、恰も汽車に乘りて東京に行きたいから行く、東京へ着して後何を爲すべきかは知らぬと云ふと一般、其馬鹿さ加減實にお話にならぬ。此の如き馬鹿な目的を立てゝ活動せば、其得た物の分量が如何に多大であらうとも、夫は死んだ財産、死んだ名譽、死んだ學問、死んだ壽命である。冥途ならばイザ知らず、現世では死んだ學問、死んだ名譽、死んだ權利、死んだ壽命は更に必要はないのだから、如何程多量にあつても何等の價値もなく意義もなく効能もないのみならず、却て恐るべきバチルスが其中に發生して自他に損害を與ふる危險がある。

欲深き人の心とふる雪は

積るにつけて道を忘るゝ

單に本能の欲望に滿足を與へんとて働く人々は、其欲望が大なれば大なる程、其裏には大なる罪惡と苦痛が伴うて居ることは、茲に説明する迄もないことである。お互は生きた人間である已上は此の如く死せる目的を抱いて盲動するの愚を避け、意義あり價値あり効能ある生きた目的を立てゝ大活動をせねばならぬ筈である。

四　眞正の目的

眞正なる人生の目的は何であるかと云へば、古今に通じ、東西に亘りて全人類に共通せる最後の目的である。斯く云へば人間にナンデ其樣な目的があるべきぞ、吾等は自分の知らぬ間に兩親が勝手に生み落されたものであるが、生れた已上は自殺するのも嫌だから已むを得ず生活して居る迄のことで、初より自分が一定の目的を立てゝ生れて來たものではない、人間は何が爲めに生れたかなぞ云ふ問題は、暇な學者ぞもが勝手に附けた理屈であると思ふ人があるかも知れぬ。併しながら宇宙間に在る萬物は一として目的の

ないものはない。プラトーンと云ふ學者が

目的は太陽の如し

と云はれてある通り、世に太陽の熱がなければ萬物は育たぬ如く、目的なくては一物も生れて來ぬ。扇子は風を起すために、コップは水を入れるために、筆は文字を書くために、マッチは火を出すために出來たもので、是等の物が各自の目的に叶はぬやうになれば、其物は棄てられて存在することが出來ぬでないか。人工の物品に夫れ〴〵目的あるのみならず自然界の土石草木、さては禽獸虫魚の下等動物、何れも目的ありて生れ出て居るのである。

我道は昔も今もかわりなく

やなぎはみどり花はくれなひ

で、宇宙萬物皆悉く目的ありて生れて居るところが其儘眞理の顯現である。人間已下の萬物に目的があるに、獨り萬物の靈長たる人間に目的がない筈はない。唯だお互は自ら自己の目的を知らずに居るから、無いやうに思うて居るのである。器物自ら器物の目

的を知らず、草木自ら草木の目的を知らず、禽獸自ら禽獸の目的を知らぬけれども、人間より見れば皆な夫れ〴〵に目的ある如く、人間の目的は人間已上の佛陀が能く之を知つて御座るのである。人間の眼は物を見るの機關なれども、自分の顏を見ること能はず るを以て鏡に寫して之を見ると同じく、吾等の智識は道理を知るの機關なれども、自己の目的を知ること能はざるを以て、佛の御敎に依りて之を知らねばならぬ必要がある。然らば佛の敎へ給ひし人生の目的は何であるかと云へば「佛に成る」と云ふ一句である。斯く云へば夫は佛敎の目的でないかと疑ふ人があるかは知れぬが、佛敎の目的が取りも直さず人生の目的である。佛敎は人生の目的の何物なるかを指示し、之に到達する方法を敎へたもので、夫れ已外に別に佛敎なるものはない。佛に成ると云へば何だか一種變つたことのやうに聞ゆるが、其實は自己本來の眞價を發揮すると云ふに外ならぬ。既に成佛が人生の目的であつて、成佛とは自己本來の眞價を發揮することだとして見れば、眞正なる人生の目的を立てんとするには、先づ自己本來の眞價を知るのが先決問題である。

五　目的を立つる基礎

礦物と植物とを比較し、植物と下等動物とを比較し、下等動物と人間とを比較せば、其表面は大に異なる樣に見えるけれども、仔細に其實質を調べて見れば全く同一のものなりとは學者の說く所。弘法大師は卽身成佛義の中に

六大能く一切の佛、及び一切衆生、器界等の四種法身と三種世間とを造る

と仰せられて、宇宙間の一切萬物は、皆同一の實在たる六大の顯はれたものなれば、本來の價値に於て同等であるぞと敎へられてある。されば本體の上より論せば、啻に佛と人間と平等であるのみならず、土石草木と佛とも同じく平等である。草木國土悉皆成佛と云へる經文は、釋迦如來が其明了なる絕對の智識を以て、此の萬物同體の眞理を徹見し給ひし時のお言葉である。

草木さへ佛になると聞くからは
心ある身はたのもしきかな

で、草や木でさへ佛になれるものを、況やお互人間が佛になれぬ筈はない。吾等が佛に成り得ることは道理上至當のことなるのみならず、是非共佛にならねば自己本來の眞價を發揮することが出來ずして、世に所謂寶の持ち腐らしとなる譯である。併しながら悲いことには吾々の智識は差別見と稱する淺い智識のみで、未だ不二智と稱する深い智見が開けて居らぬから、單に表面差別の現象のみを見て其裏に隱れて居る所の平等の本體を透見すること能はず、夫が爲めに自己本來の眞價が佛と同等なることを知らず、これが煩惱の根本となりて惡を作り罪を重ね、長の年月迷の海中に沈沒して、悟りの彼岸に上ることが出來なかつたのである。

此の如く人間の肉體も精神も其實質に於ては佛と何等の不同もないのであるが、其作用を起すに當りては精神が本で肉體は末であるから、自心を知ることが人生の目的を立つる根本基礎となるのである。故に大日經には

云何んが菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり

とお說きなされ、弘法大師は

佛法遙にあらず心中にして即ち近し

と仰せられてある。されば如何に萬卷の書籍を讀みても、自心を知らざるものは愚者と云ふべく、縱令一卷の書籍を讀まずとも、自心を知れる者は智者と稱すべきである。心は形もなく色もなく聲もないから、眼で見ることも耳で聞くことも手で握ることも出來ぬ。然らば心は無いものかと云へば確かに有るに違ひない。一休禪師は

心とはいかなるものとたづぬれば
墨繪にかきし松風の音

と詠じ、或る人は

移り行くはじめもはてもしらくもの
あやしきものは心なりけり

と詠ぜられて居る如く、心は實に一種不可思議の靈體である。さりながら心は自分の所有物であるから、唯だ不可思議だと棚に上げて置くことは出來ぬ、是非とも之を知りて、善い鹽梅に之を使用せねばならぬ。併し之を學者に尋ねると、理屈詰の學説を並べて、

話がなか〳〵面倒である。吾佛敎に於ても其哲學的方面から説明すると、隨分込み入つたことが多くて、素人には解り難い。依て私は哲理とか學説とか云ふ六かしい話は拔きにして、普通一般の人に解り易い方面から話を致さうと思ふ。

孟子は心の本性は善だと説てあるけれども、荀子は之と反對に心の本性は惡だと説てある。本性惡なものが敎育や、習慣の力で、善になると云ふも、一理屈はあり、又た本性善なものが誘惑や習慣によりて惡になると云ふも、一理屈はある。けれども能く考て見れば性善とか、性惡とかの一方に片附けるのは體と用との關係を無視した説で道理がつまぬ。

凡て天地間の一切萬物には、必ず體と相と用との三を具へて居る。體とは本體で、相とは現象で、用とは作用である。眞言宗に於ては此の三を三大と云ふのである。此の三は一物の上の三方面であるから、三にして而かも一、一にして而かも三で、別々に切り放すことは出來ぬ。此の三大不離の道理から考へて見たならば、人間に善行と惡行とあるは、心の內に善惡二つの本性を具へて居ることが解る。若しも心の本體に其種がなかつ

たならば、行爲となつて作用が外に現はれる道理はない。故に弘法大師は

惡しゝとも善しともいかで云ひはてん

をり〳〵かわる人の心を

と詠じ給ひ、法然上人は

池の水人の心に似たりけり

濁りすむことさだめなければ

と喩へられてある。眞言宗に於ては此の體用不離の道理に依りて、人心を善とか惡とかの一方に片附けずして、其奥底に善惡一切の性能を具備して居ると說くのである。既に善惡一切の性能を具備して居る已上は、これが外界の善惡の緣に從うて或は惡を作り或は善を行ひ、其結果として善惡一切の世界に生れ得べきは、因緣因果の原則上當然のことゝ云はねばならぬ。此の道理を具體的に詳しく說明したのが一心十界の敎である。十界とは一には地獄世界、二には餓鬼世界、三には畜生世界、四には修羅世界、五には人間世界、六には天上世界、七には聲聞世界、八には緣覺世界、九には菩薩世界、十には佛世界である。一々說明すれば長くなるから今は略するが、要するに善惡一切の世界を十の階級に區別したのである。お互の心の內には此の十種の世界に生れ得べき、本性を具へて居るゆへに之を一心十界と云ふのである。これは獨り人間の心のみならず、宇宙間の凡ての生物の心にも同じく此の十界の性能を具へて居るのである。此事は金剛頂經や華嚴經を始め、多くの經論の中にお說きなされてある。弘法大師も

十界の所有は並にこれ我心なり

と仰せられ、古歌には

受けかわる十の姿のさまぐも

みな心よりなすにぞありける

と詠じてある。此處で特に注意すべきは、お互人間の位地である。十界の內、最下等の地獄界の者ならば、夫より上へ昇る處はない、又た最上等の佛界の者ならば夫より下へ落る處はない、人間は其の中間即ち善と惡とのマン中に居るのである。故に下を見れば自分より階級の低き者が四通りあり、上を見れば自分より階級の高き者が五通

りある。善を修めて向上すれば極樂の佛となり、惡を行うて墮落すれば地獄の罪人となるのであるから、決して油斷してはならぬ。之を喩へて見れば人間の位地は恰も竹の皮の如きものである。竹の皮を以て草履を作れば足の下に踏附けられ、笠を作れば頭の上に載せられる、原料は同一であるけれども、作り方が違ふために、此の如く上下の懸隔が出來る。佛界の如來と、地獄界の罪人とを比較して見れば、天地雲泥の相違あるが、本來の心に異りがあるのではない、同一の精神が異りたる方向に進みし結果である。

人の身は作りやうにて笠となり
草履ともなる竹の皮かな

然らば吾等が佛になつた時には、心内の惡性はドウなるのか、地獄の罪人となつた時には、心内の善性はドウなるのか、善惡共に本來具足の性能ならば、取り除くと云ふ譯にも行くまい、かと云うて地獄の罪人に善性の作用もなく、極樂の佛に惡性の作用もないではないか。これは誰にも起るべき疑問であつて、佛法に於ても頗る肝要な點である。佛法で斷惑と稱して種々に研究してあるが、私は今解り易き爲めに柿の喩を以て此の疑

問を解釋しやうと思ふ。

柿には澁味と甘味との二の性能を具へて居る、恰も吾等の心に善惡の二要素があるのと同じことだ。初は柿全體の力が澁味の一方にのみ働いて居るから、食ふことは出來ぬが、之を熱湯の中に入れて蒸すか又は太陽の光線に晒したならば、今度は反對に柿全體の力が甘味の一方にのみ働くやうになつて、人々喜んで之を食ふ。然らば初の澁味を取除いて甘味だけを殘したのかと云へば決してソーでない。

澁柿の澁そのまゝの甘さかな

で、熱湯や光線の力に依りて澁味が其儘甘味にかわつたのである。

人間の心も此の如く、極惡人である間は全精神の力が惡の一方にのみ働いて居るけれども、佛敎の熱湯で蒸され、如來の慈悲の光線に晒されたならば、惡心の澁が其まゝ善心の甘味にかわるのである。惡心を捨てゝ善心を殘すのではない、惡心が其まゝ善心となるのである。不斷煩惱得涅槃とか、煩惱即菩提とか云ふ佛敎の專門語は此意味である。此の如く自心の本性を明らめたならば、佛の心も我が心も一切生物の心も、皆同じく十

界の德を具へて居るのであるから、其實質に於て寸分の相違なきことが解る。弘法大師は弘仁の御遺誡に此道理をお諭しなされて

我心、佛心、衆生心、此の三は差別なし

と仰せられてある。

既に自心の中に佛陀と同等の寶玉を具へて居ることが合點せられたならば、これを何時迄も罪惡の泥中に埋めて置いては、啻に寶の持ち腐らしとなるのみならず、未來永劫苦痛の中に泣き暮さぬばならぬから、お互に自己現在の狀態を省みて大に慚愧し、是非共此の罪惡の陋態を脱して本來固有の眞價を發揮し、佛と同等の地位に登らねばならぬと決然たる志を立てねばならぬ。此の如く志を立つることを佛敎では菩提心を發すと云ひ、之を略して發心と云ふのである。吾々が未來世に於て淨土に往生するも、現世に於て成佛するも皆悉く此の發心が根本原因となるのであるから、發心は實に向上發展の第一歩と稱すべきである。故に大日經には

菩提心を因と爲す

とお說きなされてある。

立てそむるこゝろざしだにたゆまずば
龍のあぎとの玉もとるべし

で、此の菩提心さへ堅固であれば、佛に成ることは露程も疑ひはない。して見れば發心の中には一切の善根と一切の功德が籠つて居る譯であるから、お經の中には

一念菩提心を發起せば百千の塔を造立するよりも勝れり

と說き給ひ、又は

發心と畢竟の二つは別なることなし、此の如くの二心は先心を難しとす、自ら未だ度を得ずして先づ他を度す、是故に我れ初發心を禮す

と說いて發心の功德を讃嘆せられてある。

併しながら悲しいことには吾等の精神は常に善心と惡心とが二重に働くもので、一度發した菩提心に對して自心內の惡魔が頻りに防害を加へ、動もすれば中途に挫折することが屢々あるを以て、能く注意して之を防ぎ折角發した菩提心の退轉せぬやうに勉めねば

ならぬ。中江藤樹先生が或人の許に送りし手紙の中に

心の奥の主人公に日〻對面なされ候はゞ可然候

と云はれて、惡魔のために本心を失はぬやうに勸められてある。或る大酒家が散々呑んだ結果酩酊して大失策を演じ、醒めて後大に慚愧し

今後は斷然禁酒せん

と思うたは本心の働きで至極善かつたが、呑み過ぎた結果頭痛がするので茶を呑まんとして臺所に行きしに、德利が隅の方に轉がつて居るのを見て、忽ち其本心を失ひ

二日醉には迎ひ酒がよい熱燗で一杯やろう

と獨語しつゝ又た呑んだと云ふ話がある。今後は斷然禁酒せんと思ひしも我が心、熱燗で迎ひ酒を一杯と思ひしも我が心であるが、前心は善で後心は惡である。時に依ると善惡二心が同時に競ひ起りて、恰も彼の常陸山と梅ヶ谷の相撲の如く、必死となりて戰ふことがある。其時善心が勝てば善道に進み、惡心が勝てば惡道に陷るのであるが、此惡心はなか〳〵抵抗力が強い。王陽明も

山中の賊を亡ぼすは易く心中の賊を亡ぼすは難し

と云はれ、大聖釋迦如來でさへ此の自心中の惡魔退治には、成佛なさる間際まで大に苦心なされた程であるから、お互が微弱なる自己の力のみを以て、之を擊退することはなか〳〵容易な業ではない。

ソコで吾々は一大援助者を賴み、折角立てた目的の途中に挫折せぬやうに保護を與へて貰はねばならぬ。

六　目的を達せしむる援助者

吾等が人生の目的を達するに就て賴むべき援助者は佛である。佛は慈悲と智惠の圓滿なる御方で、眞正の目的の何物たるかを知らずして、誤れる目的や死せる目的の下に醉生夢死する人間を憐み給ひ、懇ろに人生の目的と之に到達する方法とを敎へ、微力なる吾等に强大なる靈力を加へ、剩へ吾等が其目的を達すべく進み行く前途に横はる障害物を除き給ふ御本願があるのだから、お互は朝夕佛壇の前に端坐して

(1) 心に佛の慈悲を念じ
(2) 口に佛の眞言名號を唱へ
(3) 手を合して拜み

以て其保護援助を祈らねばならぬ。これは至極簡短平凡な行ひ方であるから、當時の學問あり智識ある人には何だか馬鹿らしい樣な感じがするかも知れぬけれども、高尙なる眞理が此の平凡なる修行方法の中に籠つて居るのである。

言ふ迄もなく宗敎の本義は人間と人間已上の神又は佛との一致にあるのだから、お互佛敎の信徒は朝夕佛前に於て、心に佛を念じ佛と一致することを修練せねばならぬ。佛は大慈大悲の心を以て晝夜の別なく常に我等を御照らしなされて御座るのであるから、我等が固く之を信じ赤子が母を思ふ如く、唯だ一筋に之に縋り奉れば、佛と我との精神が交渉一致することが出來る。此の狀態を眞言宗では入我々入と云ふ、入我々入とは佛は我が身中に入り我は佛の身中に入り、平等一致すると云ふ意味である。我等が此の入我々入の精神狀態になつたならば、强大なる佛の慈悲力が我全身に感應し融通して居るの

であるから、苦痛も恐怖も自然に無くなつて、無畏安樂の身となられるのみならず、非常なる場合に遭遇した時に、偉大なる不思議の活動を現はすことが出來る、彼の催眠術を行ふに當り、施術者と被術者との精神が一致して、種々の効驗が現はれるのを見ても、入我々入の精神狀態が如何に靈妙不思議なる働きがあるかゞ知れるではないか。

凡そ物の妙所は彼我の障壁を無くして、對象と一致冥合した所にある。例せば八月十五夜の天に鏡の如く晃々たる月を眺めて、ア、好い月ぢや、清らかな光ぢやと思ふた時には我を忘れて月と一致し

月やわれ我や月やのわかぬまで
心もすめる秋の夜の月

の快感に打たれずには居られぬ。地上の我が月の世界に昇るのでもなければ、天上の月が我の側に落ちたのでもないけれども、ア、好い月、ア、清らかな光と思ふた時に、幾百萬里の距離は忽ちに無くなつて、兩者が一致冥合するのである。無情の月に對してさへ此の如し、まして悲智圓滿なる佛と一致したならば、其內心の喜びと樂しみは言葉に

も文字にも言ひ現はすことが出來ぬ程であることは、信仰の經驗ある人の能く味うて居ることであろう。

此の佛と我と一致融合する心を外形に現はすのが合掌である。手の合し方に付ては十二合掌と申して十二通りの合し方があるが、右の五指と左の五指とを交叉するのが普通の合し方で、之を金剛合掌と云ふ。此の意味は右の手は佛で左の手は我で、之を合すは即ち佛と我と一致合體した相である

右ほとけ左はわれと合す手の
中ぞ床しき南無のひと聲

當時の青年には佛前に合掌するのを恥づる傾向がある樣に見受けられるが、是は甚だ心得違ひだと思ふ。凡そ我等の態度の中で、神佛の前に手を合したほど殊勝な姿はあるまい、殊にこれが佛と我との一致せる內心が外に現はれたものとすれば尙更ら尊いではないか。

心の中で佛を念じさへすれば手を合さなくてもよいでないかと云ふ人が世間に多いが、

これは取るに足らぬ空論である、何故なれば內に謙讓の心がありても、人に對して禮儀をせぬ者は謙讓の德があるとは云はれぬ。又た內に慈悲の心がありても、憐れなる孤兒に對して何等の施しをもせぬ者は、慈善家とは云へぬ如く、如何に內心に佛を念じて居ると云うても、手を合して禮拜せぬ人は眞正の佛敎信者とは云へぬ。眞實內心に佛を念ずる人なれば、夫が外形に現はれぬ筈はない。且又た身體の持ち方に依りて精神の調ふものなることは、茶席に坐せば自然に心が靜まるに徵しても明かである、佛前に端坐して手を合す外形の整ふた時には、內心も自ら佛と一致する狀態になるものである。されば內心の發現と云ふ意味より論じても、外形に依りて內心を修めると云ふ意味より論じても、手を合して佛を拜むことは必要である。

既に心に佛を念じ、手を合して拜む以上は、口に眞言を唱へ名號を唱へるのは自然の順序である。これは佛と我との一致を音聲に言ひ現はしたものである。オンとか南無とか云ふ文字は我等が佛に對して捧ぐる信仰で、遍照金剛とか阿彌陀如來とか云ふ文字は、慈悲の結晶體たる佛の御名で、之を連結して唱ふるのは卽ち佛の慈悲と、我の信仰との

一致合體である。凡そ信仰の對象に向て其名を唱へ之に縋ることは、世界各宗敎を共通して居る一要件であることは今更ら言ふ迄もないが、之は獨り宗敎上のみならず、人と人との間に於ても、至情の發露した場合には必ず其名を呼ぶものなることは、兒童が苦樂共に親の名を呼ぶに徵しても明白である。佛は慈悲の親で、我等は其子である。弘法大師は佛のことを「大覺の慈父」と仰せられ、釋迦如來は我等に對して「悉くこれ吾が子なり」と仰せられてある。されば我等は朝夕佛前に於て眞言名號を唱ふるのみならず悲しい時にも喜ばしい時にも之を唱ふることが必要である。我等の口は昔から云ふ通り禍の門で、兎角人の惡口を云ふたり、虛言を吐いたりする方に傾き易いものである、然るに今眞言名號を唱ふる時は自ら惡口も虛言も出ぬ樣になるから一方には罪惡を造らず、一方では功德を積み一擧兩得の功能がある。元來眞言や名號を唱へると云ふことは佛の方より云へば必要ではないのであるが、我等に取りて必要なのである、何故なれば佛の智惠の眼は我等の心の奧底まで見拔いて居るのであるから、我に信仰心の有るか無いかは能く御承知である決して我等が眞言や名號を唱ふるを待ちて後に始めて承知せられるのではない、唯だ我等は動もすれば佛のことを忘れ易い、ソコで口に之を唱へ自分の唱へた聲を自分の耳に聞きて、心の內に佛の觀念を呼び起す必要があるからである。此の如く心に佛を念ずること、眞言や名號を唱ふること、手を合して拜むことの三つは精神と態度と音聲との上に於ける佛と我との一致である。順序より云へば心が先きに信念を起して次に態度と音聲に之を現はすのであるけれども、修練の方法としては態度と音聲を先きにして、夫れに依りて內心の信念を修養することも肝要である。

斯くて日々怠らず修行して居れば、習ひ性となりて終には行住坐臥常に佛と離れぬ妙所に至ることが出來る。よし其所迄行かぬ間でも、一回は一回より功德が增加し來り、佛の如護と援助とを得て確固不動の精神となり、外界の障害を排除し得て無事に其目的地に到達することが出來ることは決して間違はない。

七　目的の實行

一方に於て佛を拜みて其援助を賴むと同時に他方に於ては自己の力量に叶ふ範圍に於て

社會國家の爲めに盡さねばならぬ。元來佛になると云ふことは、唯だ自分が眞理を悟るばかりでなく、自分の悟りし眞理に依りて世を救ひ人を導くのが本意であるから、大日經には

方便を究竟とす

とお說きなされてある。

佛に成つて極樂に住居し夏は風の涼しい處で午睡をなし、冬は暖かい炬燵の中に寢ころんで自己一身の安逸と快樂とを貪らんと思うて信心するが如きは、決して大乘佛敎の本意に契はぬのである。親鸞上人が

安樂世界にいたる人、五濁惡世にかへりては釋迦牟尼佛の如くにて、利益衆生きはもなし

と云はれたのは、卽ち眞宗に敎ふる所の還相回向のことであらう。これは獨り眞宗に限らず大乘佛敎に屬する宗旨は、其言葉こそ異なれ何れも自己成佛の上は、淨土に住まらずして娑婆に還り來りて世を濟ひ人を導くを以て本旨とするのである。

吾が眞言宗も其本旨は同一であるが、之を行ふ順序が眞宗の云ひ方とは大に違ひ、一旦佛に成つて後之を行ふにあらずして、最初菩提心を發した當時より自己の力量に相應したことを爲し、世のため人のために働けと敎ふるのである。學問して人を敎へんと志を立てた已上は、ナニも學校卒業を待ちて後でなければ、人に敎へぬと云ふには及ばぬ、いろはを習ひ覺えた其時より之を人に敎ふるが至當である如く、一度び佛に成らうと菩提心を發した已上は、極樂往生をして後に娑婆に還ると云ふが如き優長なことをするに及ばぬ、最初第一歩を踏み出した其時より、學力ある者は學力を以て、金力ある者は金力を以て、智力ある者は智力を以て、體力ある者は體力を以て、辯力ある者は辯力を以て、文力あるものは文力を以て、德力あるものは德力を以て、地位名望ある者は地位名望を以て、世のため人のために働くべきが當然である。無い物を出せと强ふるのではなく、各自持ち合せの品物を善用して佛陀大悲の行をせよと云ふのであるから、決して無理な注文ではない。

元來眞言宗は果上の法門と稱して、佛の思ふこと行ふこと言ふことを、其儘吾等に行は

しむるのである。勿論佛と吾等とは之を實行するに付て、全體と部分との大なる區別はあるけれども、吾等凡夫の行ふことも其事柄は佛の行ひ給ふ所と同一性質のものである。言葉を換へて云へば眞言宗に於て敎ふる佛道は假りの方便や一時の手段にあらず、初より究竟眞實の道を行はすのである。譬へて云へば眞言宗は汽車の切符にあらずして、囊中の金錢である。切符は京都より新橋迄行けば最早用なき物であるが、囊中の金錢は京都で切符を買ふ時にも要るし、東京へ着いて後も要る。眞言敎は凡夫の時代にも必要であるが佛に成つて後も必要なのである。唯だ其異なる所は凡夫の時は一部分しか行へぬのと佛に成つて後は全分が行へるとの點である。

然らば吾等が社會國家のために働き、世を救ひ人を導くのは其功德を以て自分が佛に成る資本に充てるのかと云へば決してソーではない。既に佛に成つて自己本來の眞價を發揮せんとの目的を立てた已上は、佛の行をするのは自己の目的に對して當然の務であるから行ふのである。言葉を換へて云へば最初から其目的を實行するのである。併し眞言宗に敎ゆる所は目的と手段とが同一であるから、他の爲めに行ふ利他の務が其儘自己向上の手段である

立寄りて人のためにと手折りしに
先づ我が袖に匂ふ梅が香

で、功德は先づ我身に受けるのである。學者の眞價は學校の卒業證書を握りて自慢する點にあらずして、小供と同化して綱引きもし唱歌も歌ひ、年齡の老幼と學問の有無を忘れて之を敎ゆる點にあり、婦人の眞價は化粧を凝した美しき點にあらずして、髮の崩れたのも忘れ、衣服の汚れたのも頓着せず、誠心こめて赤子を育つる點にあるが如く、人間の眞價は世のため人のため、誠心誠意力を盡す所に現はれるのである。お互に生れ難き人間に生れ、逢ひ難き眞言密敎に逢ふことを得たる幸福を喜び、人生の眞正なる目的が成佛に在ることを確信し熟知し、一方には先覺者たる佛陀に信賴して其加護助力を祈り、一方には各自持合せの財力や學力や體力を善用して世のため人のために利他の行をなし、自己本來の眞價を發揮するを目的として大活動をせねばならぬ。此の如くすれば未來に淨土往生するにあらずして此世其儘が淨土となり、死んで後に佛になるにあらず

露光量違いの為重複撮影

して此身此儘に佛の仲間入をすることが出來るのである。（完）

團員

顧問　土宜大僧正

同　松永僧正

同　長谷僧正

同　釋僧正

同　眞井僧正

石原徹猛　井本琢明　市橋眞量　石川弘應

泉光俊　井上春道　箸藏泰岳　楳林靜雲

常葉興智　小田慈舟　岡田舜我　金田元成

高橋敎純　次田智海　雲峰天壽　山口光憲

山本忍梁　增田慈照　藤田智燈　小島章政

麻生靈光　佐藤秀全　吉祥眞雄　廣智安道

森　玄眞　妹尾義仁　瀨木俊明　杉　秀遍

「いろは順」

大正二年三月廿六日印刷
大正二年四月一日發行

編輯兼發行者　眞言宗傳道團
代表者　藤生靈光

印刷者　平澤新次郎
京都市下京區長門通り柳ノ小路上ル五百七十七番地

印刷所　大新報社印刷部
京都市下京區三哲通り大宮東入第一番戸

發行所　眞言宗傳道團
京都市九條東寺町
眞言宗總合事務所內

露光量違いの為重複撮影

して此身此儘に佛の仲間入をすることが出來るのである。（完）

顧問　土宜大僧正

同　松永僧正

同　長谷僧正

同　釋　僧正

同　眞井僧正

團員

石原徹猛　井本琢明　市橋眞量　石川弘應

泉　光俊　井上春道　箸藏泰岳　楳林靜雲

常葉興智　小田慈舟　岡田舜我　金田元成

高橋教純　次田智海　雲峰天壽　山口光憲

山本忍梁　增田慈照　藤田智燈　小島章政

麻生靈光　佐藤秀全　吉祥眞雄　廣智安道

森　玄眞　妹尾義仁　瀨木俊明　杉　秀逼

「いろは順」

大正二年三月廿六日印刷
大正二年四月一日發行

編輯兼發行者　眞言宗傳道團
代表者　麻生靈光

印刷者　平澤新次郎
京都市下京區黑門通り梅ヶ小路上ル五百七十七番地

印刷所　六大新報社印刷部
京都市下京區三哲通り大宮東入第一番戸

發行所　眞言宗傳道團
京都市九條東寺町眞言宗聯合京都大學內

終